

京都の改革

4

国際活動経験が採用条件

京都市にはユニークな教員採用枠がある。

教壇前に置かれたラジカセからカーペンターズの「トップ・オブ・ザ・ワールド」が軽快に流れ出す。「音楽が終わるまでに単語を埋めて」と明るく指示を出す京都市立弥栄中学校の英語教師、塩見登さん(34)の英語は、アフリカ南部の国ジンバブエ仕込みだ。母校の私立中学の非常勤講師を2年経験し、京都市の教員としては1年目だが、教科書も開かず、ぐいぐいと生徒を授業に引き込んでいく。塩見さんは1999年から約2年間、ジンバブエで青年海外協力隊員として現地の子供たちにソフトボールを指導してきた。ソフトボールは、高校時代のほか、

教育ルネサンス

No.517



テンポのよい授業で生徒を引きつける弥栄中の塩見教諭



社会人のクラブチームに所属した経験を持つ。帰国後に教員免許を取得し、京都市が2005年度から始めた「国際貢献活動経験者特別選考」枠で教員に採用された。青年海外協力隊の派遣経験が受験資格だ。

塩見さんら2期生は10人。2年間で計16人が小中学校の体育や社会科、理科などの教員として配属された。派遣先はコスタリカ、エルサルバドル、パプアニューギニア、フィジー、モザンビーク、パラオなど10か国にも及ぶ。今春も9人の採用が決まっている。

*

京都市では1989年からこれまでに13人の教師が青年海外協力隊に参加し、教職に戻っている。こうした人たちの熱意や視野や経験を生かすことと、「国際観光都市」として「内なる

国際化」を進める市の施策が結びついて、特別選考の発想が生まれた。体験を話してもらったことで、子供たちに国際的な視野を身につけさせる狙いもある。

「自分の歩んだ道が100点とは思わないが、いろいろなことをやって今がある。子供たちにもいろいろなチャレンジをして、と伝えたい」と塩見さん。水不足、激しいインフレ、貧しい医療など、現地の厳しい生活環境を題材にした道徳の授業も展開。学生時代からこれまでに訪ねた世界各地の写真を見せながら、その体験も伝えている。

「親しみやすく、ほかの先生とは雰囲気が違う。不思議で愉快な自由人」と期待する。

教員の特別選考 青年海外協力隊経験者の特別選考枠は、2007年度の採用試験で富山県も設けた。長野、愛媛両県では経験者に加点をするようになった。企業などで専門分野の知識や経験を持つ社会人の特別選考を実施しているのは06年度で18県市。英語能力試験TOEICで900点以上や、スポーツ・芸術分野での国際的な活躍を条件にした採用の制度を持つ自治体もある。

市教委教職員人事課の清水稔之課長(48)は特別選考で選ばれた教員について「子供に接する力や、何事も積極的に行う力もある。言葉が通じないような環境でコミュニケーションを取ろうとしてきた力が、日本の子供と接する際にも発揮されている」と高く評価する。

(野口賢志)